

1 - 7 釧路沖の海底地形

Submarine topography off Kusiro

海上保安庁水路部

Hydrographic Department, Maritime Safety Agency

今回変動地形を報告する海域は、釧路沖の大陸棚から千島海溝に至る大陸斜面である（第1図）。海域における大陸斜面の最深部は、水深 6300m であり、千島海溝の海溝軸までは含まれていない。

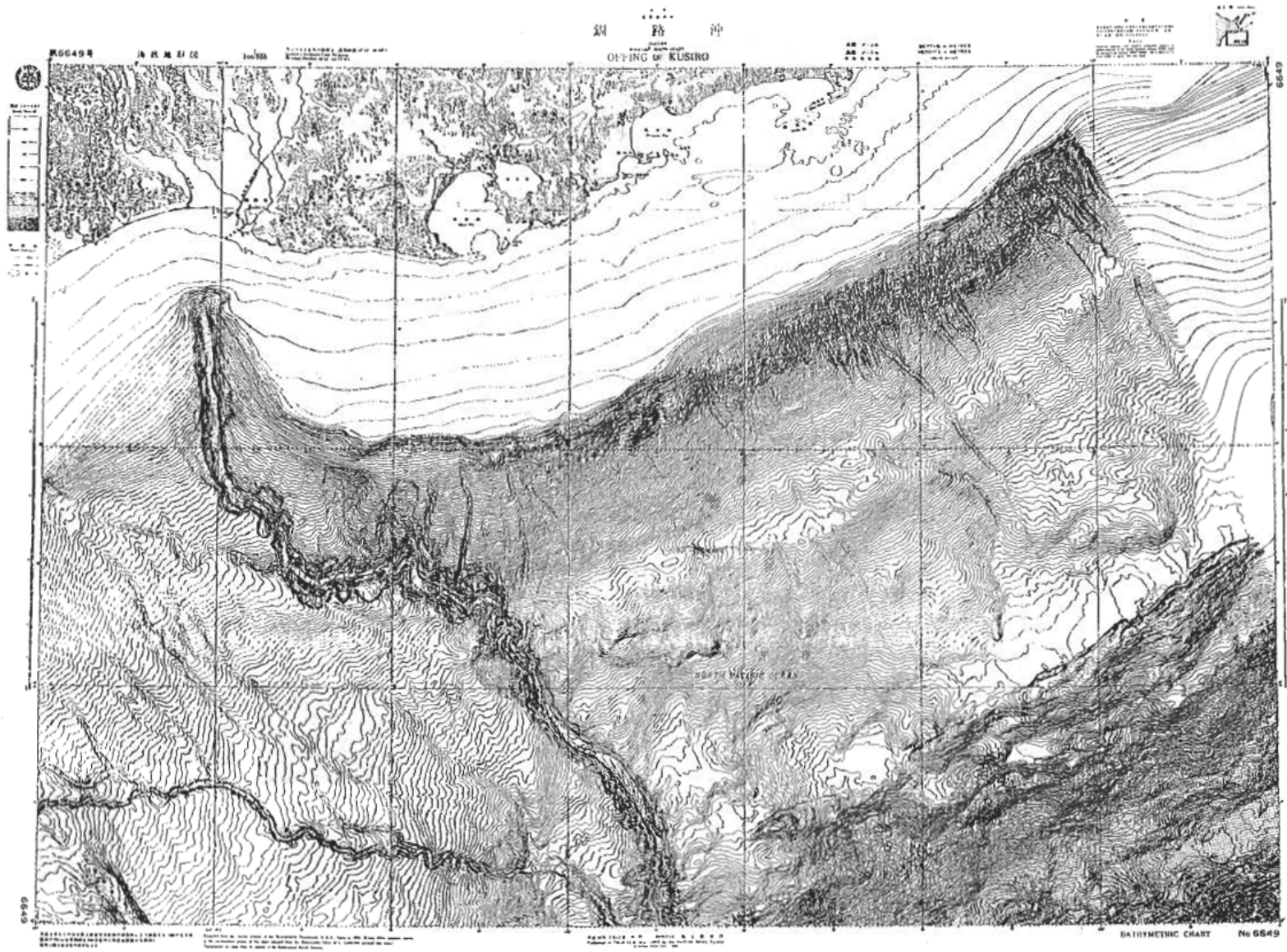
第1図に使用した測深データは、沿岸の海の基本図（縮尺 1/5 万）、旧大陸棚の海の基本図（縮尺 1/20 万）および平成 8 年度海洋測量で取得したシービームデータである。水深 200m 以深の海底については、海域の北東端を除き、シービームデータから作成した。平成 8 年度の調査においては、マルチビーム測深機である「シービーム 2000」で、測線間隔 2 ~ 4 マイルの測深を行い、水深 500m 以浅の浅海部を除いて未測部分のないデータを取得している。

釧路沖の海底は、海域の西部を北北西から南南東に大陸斜面を下刻する釧路海底谷を境界として、東と西で地形の特徴が異なっている。釧路海底谷の東では、色丹島を通り択捉島南方まで連続する幅約 28km の大陸棚が発達する。大陸棚の外縁からの斜面には、水深 2000 ~ 2200m と 3200 ~ 3300m の 2 カ所に、斜面の走向と平行なテラスが認められる。上部テラスは、下部テラスに比べ不連続で規模も小さいが、緩傾斜の斜面および小さな平坦面が北東—南西方向に配列していることによって認識することが可能である。一方、下部テラスは、南東側に北東—南西走向の比高 200 ~ 300m の外縁隆起帯とである海嶺が分布し、広い平坦面を形成している。2 つのテラスとも大陸斜面の走向に配列しており、上部テラスは、大陸棚外縁からの斜面基部が、また下部テラスは外縁隆起帯との境界が、北東 - 南西方向によく連続するリニアメントを構成する。このリニアメントは釧路海底谷において、屈曲部あるいはリニアメントと平行な支流を形成し、さらに西方の広尾海底谷近傍まで続く。一方釧路海底谷の西部では、幅 20km の大陸棚が分布し、大陸棚の外縁からほぼ傾斜が一定の緩斜面が連続し、東部のような連続するテラスは認められない。

以上のような地形の特徴から、テラスに認められる 2 本のリニアメントは、太平洋プレートの斜め沈み込みを原因とする千島弧前弧の西方へ移動¹⁾に伴い大陸斜面上の形成された横ずれ断層と考えられる。

参 考 文 献

1) Kimura G.: Oblique subduction and collision: forearc tectonics of the Kurile arc. *Geology*, 1986, 404-407.



第 1 図 銅路沖の海底地形図。等深線間隔 20m。

Fig.1 Bathymetric map off Kusiro.